



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいている大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

第六十二回神宮式年遷宮 お白石持行事に参加

本年十月二日には皇大神宮（内宮）、五日には豊受大神宮（外宮）におかせられて、式年遷宮の遷御の儀が厳かに齋行されました。

これに先立ち、夏に行はれました「お白石持ち行事」に特別奉賛を許されて、八月五日には瀬戸神社ならびに兼務神社氏子一同で参加いたしました。

二十年に一度、新たになつた御正宮の御敷地に参入させていただき、「お白石」を納めてくる行事です。まずは、「お白石」を載せた車をおはらい町通りから宇治橋前まで「エンヤ、エンヤ」のかけ声で曳かせていただきました。宇治橋からは白い布にひとつづつ「お白石」をくるみ、新殿の御垣内に向かい、檜の香りも香しい御敷地にお納めさせていただきました。まことに清々しい行事でした。

平成二十六年度祭事暦

- ◎ 一月 一日 歳旦祭
鶏鳴神事
- ◎ 三月 二日 春季大祭
祈年祭・合祀神例祭
- ◎ 五月 一日 例大祭
神社本廳献幣使参向
琵琶島弁天社へ神輿渡御
- ◎ 六月 三日 大祓式
大祓人形納め・茅の輪神事
- ◎ 七月 六日 天王祭出御祭
本社神輿御霊入・宮出渡御
- ◎ 七月 八日 三つ目神楽
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 七月 一三日 天王祭巡幸祭
天王神輿町内巡幸
- ◎ 七月 二〇日 手子神社例祭
- ◎ 九月 一七日 熊野神社例祭
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 一〇月 一二日 手子神社秋祭
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 一〇月 一五・一六日 七五三祭
- ◎ 一二月 三日 秋季大祭
新嘗祭
- ◎ 二月 八日 歳の市
開運熊手授与
- ◎ 二月 三・四日 天長祭
- ◎ 二月 三・四日 大祓式
大祓人形納め・古札焼納式
- ◎ 毎月 一日 月次祭

第六十二回神宮式年遷宮 皇大神宮 遷御の儀 奉拝の記

今回の式年遷宮にあたり、皇大神宮（内宮）の遷御の儀の奉拝を許されました。当日の感想等をここに記録して置きたいと思ひます。

午後四時までに受付とのことで、礼服にて時刻に参入しました。案内状の付記には夜間の行事ですので寒さにご注意とのことでしたが、当日は昼から蟬のさへ聞こえる程の暖かい陽気で、夕刻になっても寒さの心配も、また降雨の心配も全くない天候に恵まれました。

指定された奉拝席は、新旧の御殿を結ぶ雨儀廊のちょうど中間あたりを見渡す位置でした。今回は東御敷地の御殿から西御敷地への遷御となります。

二十年前は奉拝席の案内係を担当してをりましたが、今回は案内されて着席しました。また前回まで奉拝席は蓮敷きに着座でしたが、今回は椅子席です。

遷宮の諸儀は、伝統に則り、同じやうに繰り返されるといつても、時代により細かなところは変化してゐます。今回の御神宝装束を納

める辛櫃は素木ではなく塗り物に金具を打った立派な物になり、昨夕の河原大祓も見事であったと聞きました。

いよいよ夕闇が迫り、礼服の参列員と素襖姿の式外参列員（造営庁の工匠たち）が参進しました。

参列員の先頭には安倍総理夫妻、以下閣僚も参列されてをりました。総理の参列は昭和四年の遷宮に浜口首相が参列して以来のことで、戦後の遷宮としては新例を開く画期的なものとなりました。

御鑰辛櫃が新旧両宮に担がれて参入。ついで黒袍の衣冠で供奉員の方々の参進されたのち、奉拝席は一同起立して秋篠宮殿下をお迎へしました。秋篠宮殿下は前回の遷宮に続いての皇族代表としてのご参列でした。

すでに周囲は暗く、参進の方々の玉砂利をふむ音にご様子を拝する状況です。当たりは虫の声にあふれてきました。

午後六時から勅使ならびに奉仕諸員の参進がはじまりますが、勅使修祓、玉串行事を済ませて奉拝席の前に通られるのは六時三十分を過ぎてゐたと思はれます。

束帯の御勅使（掌典長）ならびに随員、続いて臨時祭主の黒田さま、そして大小宮司、禰宜以下の長い行列が続きます。

行列が御垣内に参入し終へると静寂が訪れます。御垣内では勅使の祭文奏上から御正殿の開扉、召立と厳肅に進んでをられることを心に想ひながら、その静寂にひたすらに身を浸します。

この間、雨儀廊で浅沓の音がするののは遷御道の準備です。真菰の莖が敷き詰められてゆきます。この作業も終へるとさらに静寂が深まった感がしてきます。

勅使祭文、開扉に合はせてアナウンスがあり、一同起立します。そのあとは、静かに出御を待ちます。

まもなく「鶏鳴」の音が聞こえるかと、誰もが耳を澄ませてゐるところに、「ピー」と甲高い声が響きました。神宮の森の鹿の声でした。

「鹿も出御を待つてゐるのか」と想ひつつ頭上を見上げると、「ククッ」と声が出た途端にむさびが梢から梢に飛ぶのが見えました。その梢に囲まれた天頂部のみの狭い夜空には明るい星がひとつ、ふたつ。

数千の人がここに集ひ、大静寂を共にしてゐるのです。そこには森や風も、虫や獣も、そして宇宙の星々も、この静寂、平穩、そして調和をともしつつ、今しも来る出御と、それによる新生命が具現するであらう「あらた」な「世」への希望を期しつつも、心を「無」にして只そこに存在を実感するだけの時間ではなかつたでせうか。

世界には様々な宗教や儀式、式典がありませうが、このやうに自然や宇宙との一体感を根底にした、しかも盛大な神事があるでせうか。

「かけこー」の鶏鳴三声がかすかに、しかし確かに聞こえました。やや時を迫り、松明の揺らめきに沓音が伝はつてきます。

頭上の梢を揺らして風が流れました。風さえも静まり出御の時刻を待つてゐたのですが、今、御神威が吹き渡るがごとく、風が起こ